

私の一生のあらすじ

思い出しそして思い出し

岩尾 忠治

エピローグ 家系

私の内（岩尾家本家）は、随分古くから日田に在住して居ると聞く。他人の方々もそう思っておられる。それでは何時頃、何処から来たかとなるとわからない。なぜなら書いたものが見当たらず。親戚も余り多くはない。古い親戚としては、現御幸通り草野忠右衛門様のお宅位ではなかろうか。私は子供の時、本家のテツ伯母から、内の系図は柳川にあり吉田様という内にある筈という事を聞かされていたが、日常必要な事でもないのでその俣にして置いた。併し愈々自分が生を閉じるとなると、それが知りたい。何とか調べてみたいと思っている。次には頼み寺の長福寺の過去帳も参考になろう。差し当り本家の寄せ墓が二ヶ所ある。その一つは渡里（京塔）現在吹上町と呼ばれる所に、可成り大きな寄せ墓がある。妻を調べにやつたが風雪幾百年か知らないが、石も昔の石で軟らかく、文字が判読出来ないと云う。次の寄せ墓は大超寺にある。これは私もかつて見たことがあるが、万治の年代から刻んである。も少し詳しく調べて子供達にも教えておきたいと思って居る。

前記の通り、岩尾家の系図は柳川吉田氏が持っているという事を本家の伯母に子供の時聞いていたので、何とか方法はないかと思っていたが、私の長女礼子が藤田家に嫁した後主人孝浩君の勤務先西鉄に、吉田と云う人が居て柳川であり先祖は日田の岩尾さんとは親戚に当ると云ったというので、それを手づるに調べたいとしたが、吉田氏の云われるには自分の方は分家で本家は尼ヶ崎に居住し、系図もその方にあると云うので、この調査は私の病気も重篤な為残念ながら中止した。

京塔の寄せ墓の文字も不明勝ちであるし、長福寺にもお伺いしたが、火事の為古い記録は今から約百七、八十年前からの記録が残っている由、そこで大超寺の寄せ墓を中心として書いてみる事にした。万治二年七月二十三日善意というのが一番古いようである。今から（昭和三十九年）約三百十年前からの死亡者の名が寄せ墓、その他（寄せ墓以外）に刻んである。したがって約三百年前から代々日田に居住して居る事だけは確かであるが、何処から、どんな人が来たかは系図がない為不明。屋号を伏見屋というところから商人であつたであろうという事は想像に難くない。又本家に古い蔵が四棟あるがその内一棟が朽ち果てた為昭和三十九年四月取り潰した。梁には元禄四年と書いてあつた事から、相当古くから栄えた商人であつたであろうことは想像出来る。

家系に就いてはこれ以上は追及しない。

書き落としたが私の母は吉井町（現福岡市在住）菊竹家から来て居られる。私の最も尊

敬する菊竹六鼓叔父の姉である。

第1章 生い立ち

私の父は次男で、伏次郎と云った。屋号を伏見屋と云っていた為この名をつけたのであろう。父の兄は嘉左衛門と云った、これは代々の世次ぎが襲名した名であつた。私の本家は豆田現御幸通り三丁目の広大な屋敷である。昔栄えた時代があつた旨うなずかれる。

父が分家する時は、本家も家計が傾き、僅かに仕分けして貰って日掛（今の町名丸の内）に分家。その頃誰も手をつけなかつた小さな牛乳屋を始めた。今の酪農業の草分けであつた。経験はなく、適切な指導者のない父の家業は、容易にうまく行かなかつた。その度、現大鶴の義兄に当る井上正之氏の養父井上武氏に助けられて、家業を継続した。家計が苦しいので、使用人も少なく、我々子供五名も学校登校前に牛乳を配達し、野菜を売りに行き少々ながら家計を助けた。幸に一家挙って努力した甲斐があつて、楽ではなかつたが女の子は女学校に、男の子供は中学校に進む事が出来た。

第2章 上級学校進学

私は現甘木市朝倉中学校に入学した。長男である為卒業後は父の後を継ぐ事になって居た。ところが五年頃になって家計も少々良くなり、父が獣医又は普通医になるなら学資を出そうと云い出した。併しもともと優秀でなかつた自分の成績と、どうせ進学せぬと決めていた為とで150名中良い時で17番、悪い時で24番位を上下する成績で程度であつた。その上、5年二学期末から三学期にかけて、腸チフスに罹患した。併しその頃の入学試験は、学校によっては七月であつた為、その当時東大の農科の専門部を受験したが落第した。それから志を立て直し、来年は旧制高校の三部（医科）を受験しようと勉強を始めた。その当時高校は全国八カ所で一高から八高迄であつた。その当時高校三部と二部理科甲類とが難関中の難関であつた。大分力がついたと思い希望通り高校の三部を受験したが再び失敗した。無理がたたつた為か、肺結核に罹り、受験直後病床に臥してしまつた。幸いに軽症だった為か六ヶ月位の安静でどうやら元気になったので、病床から大正八年三月前回の高校受験の余勢を駆って**長崎医専を殆んど準備なく受験したが、幸いに合格し、**一年間は附属病院に通いながら学業を続ける事が出来た。

第3章 入隊

一年志願兵として、その当時小倉北方の四十七連隊に入隊、一年間の現役と見習士官として引続き四ヶ月四十七連隊に予備隊として勤務した。**学業は良くなかつたが、兵隊では四十五人の志願兵中首席で通し、**終戦の頃樺太で苦労された柳勇少将は当時私の中隊長で

あつたが、大変喜ばれた事を記憶して居る。

第4章 大学教室への入局

私は尊敬する先輩から云われた事を今にも覚えて居る。医者には上手でなければならぬ事は第一の条件であるが、医者としての生命は五十迄か長くて六十迄だが、人間としては棺桶迄つき纏うものであるから、指導者の人格を選ぶように云われた。当時長崎大学には数え年三十四才で東大を恩賜で卒業されたと云う先生が居られた。**勿論内科である。**大変評判の良い先生であり、お会したのに綺麗な、澄んだ慈悲深い、未だ経験した事のない立派な目の持ち主であられた。一人前の医者にして下さいとお願いした。長崎大学は、大正十二年四月に大学になり、教室員は未だ専門学校出身者ばかりで、中には優秀な人も居たが一般に大学出には劣っていると見なければならぬ。**併し先生はほとんど弟子を叱つた事はなかつた。**先生の御苦勞が想像される。御自分は中学を首席で一高に無試験入学、一高も首席で東大に無試験入学、東大は恩賜で秀才中の秀才で東大稲田内科の三羽鳥と云われた方であつたが、その事を口に出される方でもなかつた。先生はその当時黄疸に興味を持たれ、私も黄疸の仕事の一部を持たされた。その頃例へれば満大の大野病理、九大の三宅外科が盛んに黄疸の研究をされていた。

先生は学内では勿論、長崎地方での評判は大変なもので、陸の王者とさえ云われ、四十才頃には長大病院長に、四十五才の頃には大学長になられ、数え年五十五才の時、長崎にて原爆で仆れられる迄名学長を続けられた。

先生の弟子に対する教訓「**君等は決して人間を診察してはならない。病気を診察せよ。病気と真剣に取り組む事だ**」と常に諭された。現に御自分もその通りであつた。惜しい方を原爆の犠牲にされたものである。

第5章 捧職

私は先生のお情で講師に推され昭和七年十二月、元満州国吉林省立病院の内科部長に教授会の推薦で赴任した。当時満州事変中で熱河討伐前であり、長男数え年五才、長女四才、次女二才の私には一方ならぬ苦勞であつた。妻もこのため健康を害した

第6章 開業

昭和八年二十一日、父が死亡した由の電報が満州に来た。病気は数年来、慢性多発性関節ロイマチスのため満三年位病臥中であつた。直ちに家族同伴で吉林を出発。四平街で弟精一と出会った。帰宅後親戚であり、主治医新関修治医師のお話では、衰弱し沈下性肺炎が死因と聞かされた。父は普通人にみられない気丈な性質で、満州赴任の時も私は子供も

小さいし、次女が肺炎後の病身であつたのため行きたくなかつたが、父から行けと云われて行つたのである。父の死亡の時も死ぬ迄「男の子供は二人とも満州で遠いので知らせるな」と云う命令であつたと云う。

私の内は医業ではなかつた為、現在の淡窓町矢幡様の家を借りて開業した。時に昭和八年十月三日、資本金四千五百円。

父の負債が五千円あり、これは牛乳屋を譲った姉夫婦と半額宛て支払った。医業は順調に進んだが、翌々年昭和十年一月十一日妻フミコが急性肺炎で死亡した。

第7章 応召

昭和十二年八月十七日には、日支事変で応召し北支に行った。昭和十年十月再婚した現在の妻民子の身の振り方、子供四名の預け場も母と相談して、文字通り勇躍して出征した。この時倉富君が、私を励まししながら一人で久留米迄送ってくれた姿は今にも忘れる事が出来ない。

私の行動範囲は主として神浦線から武漢三鎮であつた。このうち最も悪戦苦斗したのは徐州大会戦の前哨戦であつた台兒莊の激戦で、第五板垣兵団、第十磯谷兵団が敵約三十個師団（支那の一個師団は五千乃至一万と云われていた）に包囲され抜き差しならない破目に会った。私は第一線から七里後方のえき県に位置し衛生隊、野戦病院から後送する病兵を山本見習士官と隊長と三人で四十日間に約一万人後送した。文字通り昼夜兼行・不眠不休であつた。敵の襲撃も受けた。軍司令部は遙か後方の天津にいた為に連絡も人員補充もつき兼ねた。この一万人の傷秒兵中八割は負傷兵で紅顔の任官早々の小隊長が我々の個所を勇躍して朝通過したかと思うと、その夕方又は翌日は蒼白な顔をして、深手を負って後送され涙なくては見られなかつた。ところが、わが戦車部隊馬場連隊長？の率いる部隊がろう海線を遮断した。そのため敵は補給路を失い、かつ退路を断たれ徐州は余り戦わずして陥落した。徐州に我々が入城した時は、敵は提灯行列を行い、屋台装飾迄行って台兒莊の戦勝に一時は酔っていたようである。

私の友人である“長崎の鐘”“この子を残して”の作者永井隆君は、第五師団の野戦病院の軍医で勤務していたが、浮足立った敵と遭遇し、敢然抜刀して敵に切り込み敗逃させた功績で金を貰ったと聞いて居る。この人は学生時代からバスケットボールの選手で、体格も立派で誠に人格の高い人であつた。戦地では常に矢立てを腰にさし、スケッチをよくやっていた。死亡直前長崎に見舞つたが大学から至れり尽せりの世話をしていたが、私の顔を見るなり先輩扱いされて「一度御高診を願います」と云われた、その心意気に涙が出た。この人は学問に従つては学問に打ち込み、軍に従つてはその職責を果たす稀にみる人格者であり、死の一ヶ月前にお会いしたが、自衣に身を包み、顔は神か仏の様であつた。

第一回の応召は武漢三鎮攻略後召集を解除された。時に昭和十四年三月十八日。

第8章 第二回の応召

昭和十四年九月一日、第一回召集解除約五ヶ月後、ノモンハンの戦闘急を告げ再応召、九月十二日ハイラルに到着。今回は戦況から死を決しての出征であつた。ところが九月十六日急に停戦協定が結ばれ、我々の部隊は海南島に廻され、安藤利吉閣下が総司令官となられ、此処で陣容を整え、東京湾敵前上陸となった。私は台湾の塩田兵団に配属され、風速二十四米の強風について欽県に敵前上陸した。それから第十師団今村兵団と南寧へと猛進撃した。一段落ついて昭和十五年十二月二十一日召集を解除されたが、今村兵団の損耗は非常なものであつた。

第9章 第三回の応召

約八か月医業を営んでいるうち、第三回の応召を比島に受けた。

昭和十九年八月十七日応召、比島の戦況は極めて悪い。上陸直後から弾薬乏しく、トラック少なく、糧秣もまた乏しくガソリン少なくどうする事も出来ない。自分等はルソン島北部山中に位置したが、殆んど戦斗らしいものはしなかつた。今迄は患者輸送が任務、今回は四十六才の工兵隊付軍医であつた私の部隊は十個中隊の大工兵隊で、軍医七名中私一人が幸いにデング熱もマラリアにも罹患せず終戦迄働く事が出来た。ただ真性かアメーバ赤痢か知らないが、軽度の発熱、粘血便を排し十日間あまり苦勞した。その上敵襲ひどく、行軍に次ぐ行軍で、こんな苦しい事はなかつた。状況は日一日と悪くなり、遂に昭和二十年八月十七日に終戦を上官から知らされ、一同首をうなだれ、誰一人発言する人もいながつた。当時我々は湯川少将の率いる支隊についていた。湯川少将は、陸大を出ずに将官まで進まれた元気な方で、士官学校時代には重営倉に入れられた組で、大変な荒武者であつたと聞いていた。最後まで抵抗すると云われ、再三村岡豊師団長から使者が来て、陛下の命令により直ちに山を降れ、と説得され漸く九月十一日米軍に投降した。この時心を打たれた事は、できるだけ立派な服装で、お互いに装具を譲り合つて余力のある事を敵に示せ、と云う旅団長の命令であつた。最後まで日本軍は武士道的な気構えを持って居るなあと、この命令が有難かつた。武装を解除されての米軍の取り扱いは丁重で、これも感心させられた。

昭和二十一年一月十三日、浦賀で召集を解除され、同十五日すくすくと帰宅した、こんな情けない事は生れて初めての事であつた。

米軍収容所では一日の米の量が百八十瓦、それにラード、塩、少々の野菜で、時々魚の缶詰がある位で、殆どの方が栄養失調に陥り何か物にたよらないと真直には立てなく眩暈を感じた。

内地に帰り帰途に就く時車中一般人から席を譲ってもらえなかつた事が一番残念で、内地人も気がすさんでしまつて居るなあとこれまた情けなく思われた。帰宅後は人様のお情

けで親戚知人から色々と気を使ってもらい三月迄就床。四月から診療に従事する事が出来た。以上が三回応召した荒筋である。

第 10 章 医師会での公職

昭和十六年四月から昭和十九年八月迄日田郡市医師会長。出征のため途中でやめて応召、四十三才の会長で、大分市の辛島詢士会長がその頃では一番年少であつた。

終戦後一期県理事とさらに一期群市医師会長を勤めたが、出来栄えの良い会長であつたとは思っていない。会員の方々にお気の毒であつたと思つて居る。

第 11 章 父と私

私の父は性剛直、悪く云えば剛過ぎるように思われたが、私等の到底及びもしない頭の良さや偉さはあつた。そして真直ぐな性格でもあつた。**社会に対する功績は金こそなかったが、大きかったと思う。**例えば、町会議員の時多数議員の反対を孤軍奮闘押しきつて、杉の河内に町有林を買い求めた。これが終戦後学制改革であり、中学校が義務教育となつた為市にも莫大な金が必要になつたが、この杉の河内の材木のお蔭で、これが財源となり、市は大いに助かつた等、種々あるようだ。二代目の私は、自分の家を守るだけで、遥かに父には及びはしなかつた。

第 12 章 私の医業

私は、前述の通り全く凡人中の凡人であつた。しかし父の教育、菊竹六鼓叔父の余り口には出されない教養で鈍馬に鞭打ち一生懸命努力した。患者に対する態度は、恩師角尾先生のお諭しを守り、「**人を診るではなく病気即ち病気に取り組み、診断治療には最も意を使つてきた**」。幸いにまずい医者ながら、患者からの信頼はある程度受けたと確信している。

第 13 章 誤診

多い病人中には、数多くの誤診があつたと思う。その第一は胃癌の診断と云わざるを得ない。これは自分の力の不足もさる事ながら、現在と違って検査方法も私の頃には充分でなかつた事もあるし、多忙過ぎて勉強が不足した為、又一般人の病気に対する認識の乏しさ、又は財力の関係等、種々であつたと思う。又胃癌は自覚症状が最初極めて少なく自覚しにくい。現に私も只今胃癌患者で苦しんでいる。事の起りは、昭和三十七年十月頃から食欲の不振があらわれた。年の割に働き過ぎかと最初は一人決めしていたが、あまりに食欲不振が長く月余に亘るので、長男のすすめもあり、長崎大学高岡内科に同年十一月下旬

入院、極めて丁寧な精密検査の結果、胃癌の疑を置かれた。無酸症遊離塩酸の欠除、便の潜血反応が陽性又は時に陰性、ガストロカメラ、レントゲン検査、**就中、胃粘膜の細胞診で極めて怪しい細胞の検出で胃癌の疑**と診断され、その上大事を踏んで、東京のガンセンターの意見も聞いて下さつたと云うが、同じ返事であつた。手術をすすめられ、直接開けて見て貰ってくれとのお言葉であつた。そこで直ちに九大第一外科に転医して、昭和三十七年十二月二十四日開腹。その結果は、慢性胆嚢炎、同膵炎、虫垂癒着で胃には異常は認められないと云う事で、胆嚢と虫垂を摘出して手術を終わった。

安心感の為か、自分自身の不注意であつた為か、昭和三十八年は体重の回復が悪いだけで、他には異常を感じなく働いた。しかるに、昭和三十九年四月十二日頃から、これは主として慢性膵炎の為かと思われたが、腹痛がおこり同年七月十八日から愈々悪くなり、大河原病院に就診、同二十四日手術大河原先生が執刀、それに大河原若先生、城谷健郎君が加勢してくれた。立派な胃癌で、腹腔リンパ節にも、五、六個の転移があつたのだが、摘出は可能で今にも静養中であり、苦痛もある。

この様に医者でさえも病気の進行を見逃す事がある事を自分自身で経験した。まして素人は尚更の事と思つてもよいのではないか。胃癌の診断のむずかしさを身をもつて知った。一日も早く胃癌の治療の確立を後の人の為に切望する次第である。

第 14 章 私の尊敬する人々

私にごく身近な方を数人

恩師	角尾 晋	博士
叔父	菊竹 六鼓	氏
叔父	岩尾 昭太郎	氏
義兄	井上 正之	氏

第 15 章 私の同胞

五名

貧乏に生れ、何れも子供時代は特に難儀した。しかし母の慈悲に助けられて皆が皆、真直ぐな道を歩いて来た。今では姉が一人早死してしまつたが、幸いに後は一人前の生計を樹っている。

残る四名も一人前になつたと云つてよい。

第 16 章 感謝する二人

先妻フミコは久留米有馬藩士族石田守之助氏の三女、久しく久留米市立病院長をした石田光次氏の妹であつた。三十一才の正月、急性肺炎で死亡。子供四名。慣れない満州に赴任しかも三人の子供を連れ苦勞させた。一年足らずで帰宅後開業。金はなし又々苦勞させて僅か開業一年余りで死なせてしまった。大変相済まぬと思つて居る。何ともお詫びの云いようもない。

後妻民子は大鶴井上正之氏の妹分で、生れは秋月黒田藩士族。先妻の小さな子供四名の中に飛び込み、これまで大変苦勞をかけたが、お蔭で子供四名も立派に育ち、何れも一人前になった。医業に又家事の万端に功績は大きい、感謝している。子供等もこの御恩を忘れてはならない。父死亡後皆に頼んで置く。

第 17 章 子供等に対する父の希望

正しく真直ぐに歩き、飽く迄和合すること。他には何も云うことはない。

第 18 章 父の心境

私は同胞、友人、一般郷土の人、特に患者からも信頼して貰つて何も思い残す事もない。虚心坦懐に自分自身でも努力してきたと思つて満足している。現在大病と闘つて居るが、心の乱れも少しもない。私を世話して下さつた医師各位にも感謝して居る。只病苦だけは少々気にかかる。

医師会の先輩、同僚には皆大変お世話になつたが、特に内科に最も関係の深い外科医大河原先生には長年月御厄介になつた。内科医の二、三の方も私の良い相談相手として助けて戴いた。

第 19 章 私の社会に対する切なる希望

国家が学者に対する待遇をも少し良くして貰いたい事だ。偉い政治家であり国家を真に憂えて下さる政治家にはどんな高価な償いをしてしても決して惜しいとは思わぬ。当然すぎる事で、誰の考えも同じである筈だ。しかし今の政治家は勿論全部とは云わぬが、可成り多数の人が派閥争いに明け暮れし、身をやつし、代議士病、大臣病に患っている諸公が随分多い様に見える。口でこそすまい事を云うが心底は私利私欲の塊としか見えぬ、これらの人に月に二十四万円もの月給を給することは勿体ない。

大学が多すぎたら整理するとか、段階をつけるとか、一部を昔の専門学校に変更するとかして、大学教授の俸給にも実力によって差をつけて良い筈だ、何とかかなりそんなものだ。

役に立たぬ自己本位の政治家はどしどし皆の力で追放して行かねばならぬ。後の人によく頼んで置く。今の俣では日本は救われない。私は中学同級生で京都大学の放射線教授になり昭和二十六年放射能禍で死亡された末次逸馬君の事。私の直接の恩師長崎大学長現職で原爆にて死亡された角尾教授の後の御家族の困窮等々身を以て知っている。勿論弟子達が些少の金額を差し上げた事もあつたと思うが之はほんの雀の涙程のものでお慰め申し上げたに過ぎない。これ等は国家が生活及び御弟子の学資位は充分とは云わない迄も、出すべきではなからうか。

第 20 章 死後に対する希望

葬式の時の花輪は一切御遠慮したい。戴かねばこれに越した事はない。狭い御堂に、所狭し、と花輪を飾る事は邪魔くさく、少しも神々しくも見えない。人の立ち振舞にも邪魔になる。私は兄弟姉妹及び子供から生花を貰いたい。会葬者の方もその方が御覧になってよほど気持がよいと思う。香典返し、これは廃して精一叔父さんと相談して、おかしくない位に市の適当な個所に差し上げて貰いたい。

私の屍体研究の必要あれば、大河原先生、城谷、仁と相談の上適当にしてよろしい。

第 21 章 軍隊生活及び戦争

私は父の教育が厳格であった為か、軍隊生活を左程苦しくは感じなかつた。

戦争は私が云う迄もなく良いものではない事は当然である。ただ敗戦後日本軍隊、日本の将軍の事等ひどく批判する人が多いように思うが、私は腹立たしくさえ思う。私共が接した上官は普通人に見ない立派な方も多かつたように思う。

あの軍規厳格なきびきびした何とも云えぬ、男として一度は経験したいもので、私は良い気持で過させてもらった。

戦争では多感になるもので、よく我々は軍歌をうたつた。例えば好きな歌では「鉄の兜に弾の痕 数えて見れば感無量 大陸遙か西東 思えば転戦幾度ぞ」「泣くは虫の音草枯れて 露は戎衣を濡らせども 帰らぬ友は今何処 西湖の月夜答えかし。思えば過ぎし激戦も 今は露営の夢の中 嗚呼江州の夜は更けて 西湖の月も傾きん」等涙を浮べて歌い進撃したものである。忘れようとしても忘れられない。戦争の善悪を云つたのではない、私の実感を書いた迄だ。

プロローグ 縁

私は若い頃から、学問より、権力より、金力より、何より死ぬ時の態度が一番大切であり、その為には信心が大事である事はわかっていた。しかし勝手であつた医業が多忙であつた為、寺にも詣いらず、お説教も聞かず、心にかかりながら、今が今迄放置した。悪い事だつたとおもっている。今一つの原因は、寺の我々に対する教化の方法と云つてよかろう。門徒から金を集め、これを本山に納め、寺格云々と言つたり、寺格によって住職の衣までに段階をつけたり、我々若い者には反感こそ持て何の役にも立たぬあり方が続いた。今は知らないがこれでは真の教化は出来る訳はない。

今回縁あつた、片島弥蔵様の御紹介で長福寺のお客僧湯ノ平光泉寺江藤厚義住職のお話を聞く事が出来た。御多忙中態々病室に来られ約一時間話されたが、自然にあつたよくわかるお話で大変助かつたような気がする。

今一つは、倉富貞嗣君の御好意で禅宗沢木興道先生の本を読ませて戴いたが、充分わかつたとはいえないが、確かに心の頼りにはなつた。縁というものであろう。

(昭和四十年一月床上にて)